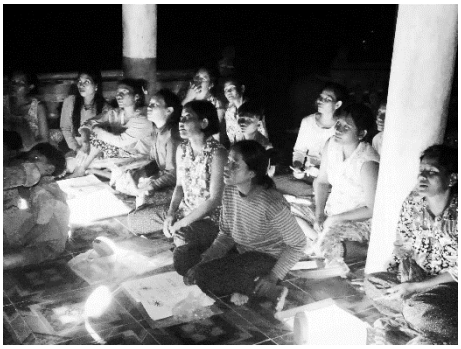
# 成人識字教育事業

カンボジアではまだまだ成人の識字率が低い状態にあります。その背景には、学校の数の不足や経済環境、さらにポルポト体制の圧政の歴史などが原因して就学年齢時に十分な教育を受けられなかったことがあげられます。そのために希望する職を得られず、貧困から脱出できずにいる人々も存在します。

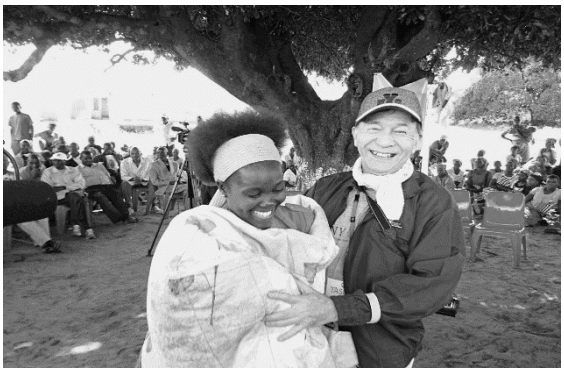
JHP25周年を契機に開始する本事業は、それを改善して成人の生活向上、さらには彼らの子供たちに学ぶことの意義を拡げようとするものです。本事業の初の開講地はコンポンチャム州バティエトロップ地区の4村、合計100名の受講生を集める予定です。現在のところ本事業には、藤原紀香基金、社団法人・日本国際婦人協会、ASAC（カンボジアに学校を贈る会）、全コマツ労働組合連合会からご支援をいただき、（株）パナソニック社からはソーラーランタンの寄贈をいただくことになっています。JHPの教育支援の新たな分野へのスタートです。



# アフリカへ毛布をおくる運動

1984年に始まったアフリカへ毛布をおくる運動は今年で34年目を迎えました。その間毛布枚数は、4,144,651枚。2017年に集められた毛布は27,326枚、輸送協力金27,200,461円。

アフリカ諸国では今も孤児、身体障がい者、高齢者、HIV陽性者、エイズ患者の女性と子ども等自立が困難な人びと、自然災害被災者、難民、国内避難民など毛布を必要とする人々がいます。昨年はマラウィ、モザンビーク、コンゴ共和国に寄贈されました。昨年4月から5月はモザンビークに毛布配布ボランティア隊が派遣され、JHPからも1名参加しました。

＜毛布配布ボランティアの声＞

モザンビークには、総勢23名が訪問しました。首都マプトより250Km圏内の3か所の村に、315枚の毛布をNGOの皆さんと協力して配布し、村人たちとの交流も行いました。そこではHIVや病人、孤児、高齢者、寡婦などの名簿を作成し、それに従って毛布を届けました。朝晩の冷え込みが激しい地域では、毛布は真に命を繋ぐ一枚。この過酷な環境でも幸せを見つけようと生きている人々の姿に深く心を動かされました。これらの窮状を伝える事、運動を推進する事の責任をあらためて認識しました。（千葉保彦）